ミコアイサ

Mergus albellus

カモ科・冬鳥

ミコアイサ（オス）

名前の由来
美しくて小さなアイサだからこの名がついたという。アイサの古名は「あきさ」で秋の早く（あきさ）に渡ってくることに由来する。漢字名：神子秋沙、巫子秋沙

特定種

北海道レッドデータ：絶滅危急種（Vu）

形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）42cm。
オスは大部分が白いが目の周囲、後頭の冠羽の下、胸側の2本の線、肩羽、背、腰、尾が黒く、パンダのような顔している。翼上面は白と黒に塗り分けられている。くちばしと足は青っぽい灰色。
メスは頭上から後頭にかけて茶褐色で目の周囲の黒味が強く、顔は白くて体が灰色。

声：日本にいる冬の間にはほとんど鳴くことがない。オスは口笛のような「フィー」という声で、またメスは「クゥッ、クゥッ」という声で鳴くという。
５月ノルウェーでの観察によると、オスが「ギュッキュー」というような濁った声を出し、メスが「コッコッコッ」と低く鳴いて、ディスプレー（誇示のための行動・動作）をしていたという。

ミコアイサのオス。小さくて白くてパンダのような顔

ミコアイサのメス

生息環境・分布

大きい河川、湖沼、潟湖、河口、内湾などに生息する。十勝には11～４月にくる冬鳥。
分布：ユーラシア大陸の高緯度地方で繁殖し、冬は同大陸南部に点在してすごす。
日本では冬鳥として11月に現れ、翌年の4月ごろまで本州、四国、九州で越冬する。北海道でも冬鳥であるが、北部で少数が繁殖する。
北海道では冬鳥。一部留鳥。河川、湖沼に生息する。北部（豊富町）の沼で少数繁殖する。
十勝では冬鳥として、河川や湖沼に訪れるが数は多くない。帯広川下流部で毎年観察されている。

生活サイクル

	１月	２月	３月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月
十勝出現期	―	―	―	―						―	―	―
ユーラシア高緯度（繁殖期）				―	―	― 繁 殖	―	―	―	―		

食性・他生物との関わり

魚類、甲殻類、貝類などを食べる。
水中に潜ってえさを食べる。水中に潜る時間は８～30秒ぐらい、２ｍぐらいまで潜るが、群れで一斉に潜る性質がある。
捕食者は猛禽類など。

繁殖生態

日本では北海道北部（豊富町）の沼で少数繁殖するほかは冬鳥で繁殖せず、ユーラシア大陸の高緯度地方で繁殖する。
繁殖期は５～７月で、一夫一妻で繁殖する。
つがい作りは冬に越冬地で行われ、そのためにオスがグループディスプレー（誇示のための行動・動作）を行う。（→興味深い話の項参照）
繁殖地ではよく茂った針葉樹林帯の緩やかな川や森に囲まれた湖沼などの岸辺の樹洞に営巣するという。
６～９個の卵を産み、産卵後つがいは解消され、メスのみが卵を抱く。26～28日くらいでヒナがかえり、メス親の世話で育つ。

興味深い話

■日本に渡来するアイサ類（ウミアイサ・カワアイサ・ミコアイサ）の中で一番小さい。そのため行動は軽快で、ほんの少しの助走で水面から飛び立つことができる。
■くちばしは細く、先が鉤（かぎ）型に曲がり、縁にはのこぎりのようなギザギザがついている。このギザギザは口の方に向いていて、捕らえた魚を逃がさないよう押さえるのに役立つ。
■非繁殖期には群れているが50羽以内の小群でいることが多い。
■オスは繁殖期が終わるとメスそっくりになるため、越冬のため渡ってきた直後の群れはメスばかりいるように見える。やがて季節が進むにつれて、白く美しいオスの姿が目立つようになる。後から来たわけではない。
■冬、つがい作りのために行われるオスのグループディスプレーは、１～２羽のメスをめぐって２～７羽のオスが泳ぎ回り、頭を上背後に振る、というものだという。（→繁殖生態の項参照）
■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカプ＝水の中にいる鳥」という。

ミコアイサのオス。渡ってきた当初はオスもメスと区別が付かないが、季節とともに白くなる

配慮事項

やや水深のある魚類や底生動物の生息する水域が必要。

参考文献

「山渓カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と渓谷社 1985（1995 ２版21刷）
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995
「北海道鳥類目録改訂２版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000
「野鳥ブックス－２ フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994 増補版７刷）
「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001」北海道 2001
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004